

# 津軽藩士殉難事件の概要とそれにまつわる過去帳と供養碑について

日置順正

〒099-41 北海道斜里郡斜里町朱円

## 1. 津軽藩士殉難事件の概要

1. 斜里での殉難事件の概要（松前詰合日記による）

この悲惨事件は、今より189年前の文化4～5年にかけて、当時ロシアのわが蝦夷地北方海域での狼藉に備えて出兵を命ぜられ、斜里に派遣駐留した津軽藩士100名が、越冬中に72名が病死するという歴史上に埋れた憐れな事件である（写真1）。津軽藩はこの事件前後25年間出兵しているが、この年が最も多く総勢1,002人出兵、松前、江差、利尻、宗谷、斜里、択捉（エトロフ）に駐留した。

文化4年 以下新暦

7月1日 弘前出発、津軽半島を北上し、三厩より船で函館へ。噴火湾沿い千歳、石狩。日本海沿いに歩き通し42日間かかって宗谷着（8月12日）。

8月13日 陣屋建築の重労働、そのうち 一部1、2番隊が斜里に転進命令、オホーツク海沿いに12日かかって到着。3番隊は、国後より海を渡り今の裏摩周を7日間山、谷を越え、野宿しながら合流した。この時すでに 9月12日、秋であった。ところが斜里には入る家がなく、やむなく小さい魚小屋を無理に空けてもらいの仮住まい。

当然ここでも翌日から慣れない体で陣屋建築の激しい労働が始まった。（杣仕事）

●木材は予定地より東方約

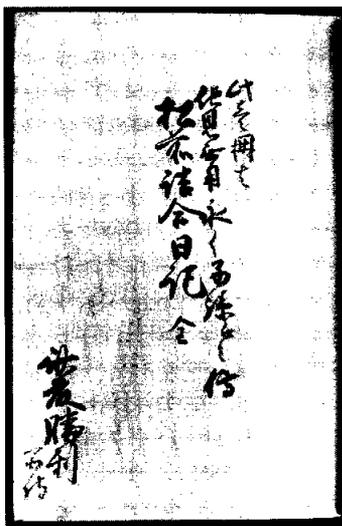


写真1 松前詰合日記

4kmの青木山の海に最も近い新道口付近で伐り出され、海上を筏に組んで人力で運び、陸揚げした。

●土台石は、さらにその東方、今の峰浜の石原海岸より、蝦夷舟に積んで人力で運んだ。

●食生活は到着からすでに秋、山菜もなく明けても暮れても船に運んできた米、味噌、塩のみ。

●寝具は全く不足。衣類は寒さに対応する用意もなく、全然袖夫向きでは無かった。

このような悪条件の中ながら、自分達の入る家を何としても建てねばならぬ為、頑張り通し、雪が降るまでに、三間梁の十間ものを始め5棟も仕上げた。

※今日我々が考えるのに、当時のこととて斜里川では晩秋になれば鮭が手掴み出来る位獲れたと思われるが、そうした対策が一切されていないのが不思議である。

当時、幕府の詰所では魚を獲ることも、アイヌから買うことも禁じ、運上屋から塩鱈を買うことのみを許した。したがって、それほど食べられなかった。

11月6日 激しい労働、副食物のない食、寒さに耐えられない寝具、衣類、バラックの家のため病人出始める。

11月14日 寒気厳しく雪降り続く。ほとんど病気に罹る（浮腫病）。今日では栄養失調。

12月12日 大吹雪、大暴れ、海水逆流し川水の飲用に困り果てた。氷押し寄せ一同仰天。

12月23日 病没者続出。飯炊き、水汲み、薪割りをする者無くなり、アイヌ青年一人雇って漸く切り抜ける。この地の人達は、冬になると全部クッチャロ方面に移動している。

〈死者数〉

12月18人、翌年1月27人、2月14人、3月11人、以後も続き、春早く病気引上げの途中、遂に力尽き、網走、常呂、紋別で6人死んでいる。

## 〈墓 所〉

陣屋の後方約5丁、平地の山合、おそらく毎回の処置は不可能で、どこかに仮安置し、暖かくなってから比較的体力の有る者が、櫓で上記予定地に運んだものと思われる。考えてみると、この斜里での一冬は全く死との闘いであった。

## 文化5年

4月27日 氷去る。暖かくはなったが、地獄のような長い冬のうちに仲間の多くは死に、何のためにこの斜里に来たのか、それを考えると、残った人達の心中は寂しい限りであった。

8月15日 漸く沖に引揚げの、迎えの船帆が見える。早速荷物を整理しその準備にかかると共に、こと志に反し憐れにもこの地に果てた72名との別れのため、墓所の上に、内地から持ってきた七寸角、二間もの松材に鉋をかけ直し、死んだ者の名前を席次順に書いて建て、遺骨の代わりに土を油紙でそれぞれ包み、名前を書いて筵で一包みにして持って行った。

8月17日 風向きよく出帆。途中利尻で10ヶ月目に漸く生魚を食べる。始めの予定は船で帰国の心算であったが、途中積丹沖で大時化にあい、命からがら上陸、オタルナイを通り、船で石狩川を上り、また、もと来た道を帰った。

10月9日 帰国。船で17人。このうち2人は越冬者でなく、この他に春先暖かくなってから軽症者13人帰国。

結局、100人のうち、72名病死、13人徒歩帰国、15人船で引揚げ。

出兵の命をうけ、出発して17ヶ月目。

その頃このオホーツク海側には漁場は宗谷に本場所があり、斜里に分設場所があっただけであった。

## 2. そこで松前詰合日記とは

この悲惨な事件の詳細を、後世に伝えたのは、この出兵に参加し、幸い船で帰国した22才の青年武士、小頭役の齊藤勝利が、露見したら切腹、お家断絶の厳罰を覚悟して、わが家で密かに書き遺してくれた〔松前詰合日記〕のおかげである。津軽藩はこの斜里事件を密事扱いにし、今日、膨大な津軽藩の古文書が収蔵されている弘前図書館の文化初期の中にも、この斜里事件のまとまったも

のは見出せないようであった。

そしてこれを書いた勝利はその後重く登用されたが、この日記には表紙にも裏頁にも（この一冊は他見無用、永く子孫へと伝、松前詰合日記全）と書いてある。

勝利は、何時かは発表しても差支えない時代を願って、書き遺したものであろう。

しかし、このような貴重な文献がどのような運命をたどつてか、146年後の昭和29年、東大赤門前の古本屋で、北海道大学教授の、北海道郷土史の大家、故高倉新一郎先生によって発見され遂次公にされたのであって、もしこの二人のおかげがなれば、おそらくこの悲惨事件は永久に世に出ず失いになったことであろう。

斜里町での慰霊碑建立運動も、この的確な資料と、地元に残る過去帳、並びに文化9年建立の供養碑など現地に実在する〔証〕とによって確信をもって進められた。

なお、この詰合日記は、北大図書館に秘蔵され貸出は行われていない。

## 3. 津軽藩士殉難慰霊碑の建立

昭和48年斜里町は、青森県並びに北海道の協力を得ながら、町民の善意を結集して藩士を葬ったと思われるゆかりの丘に、自然石の碑としては、その威容を道内に誇る立派な慰霊碑を建て、遺族、津軽藩14代目にあたる津軽義孝氏を始め、青森県及び弘前市の関係者多数参列の上、7月16日意義深い除幕式を盛大に行った。（施工 美幌町 野口石材店）

## 4. 7月16日を除幕の日と定めた理由

1)文化9年前田久太郎、尾本多吉等によって建立せられた供養碑が、7月20日に建てられてある。（旧）

2)文化6年、斜里詰合幕吏が日高様似より僧を招き最初に行った法要が7月に行われている。

3)その際建てた宝篋印塔内に納めた過去帳の裏頁に、後世の人は盆の7月に水を供えて欲しいと書き望んでいる。（旧）

4)現在の招魂祭が7月15日に執行されている。（新）

以上の諸点から7月の盆中に行うことが最も意味深く相応しい。

さらにその後の慰霊祭は、この除幕の日を継承することにした。したがって7月16日の除幕の日、即ち慰霊の日はその後における友好都市弘前市との各種交流の歴史の原点であり、将来不変であるべきである。

爾来 それまでの建立委員会を碑を守る会に改称し、毎年の7月16日（除幕の日）を慰霊の日と定め、会員現在300名、会費年額2,000円を主なる財

源にして慰霊祭を行っている。

#### 5. 弘前市と斜里町の友好都市の盟約結ばる

慰霊祭も年々盛大になり、昭和57年の慰霊祭には福士市長を始め、議会関係者並びに民間団体など大勢の参拝があり、その時の仏縁が両市町間の心の絆を固く結びつけ、遂に昭和58年2月12日、格の違いをはねのけて、友好都市の盟約が結ばれ

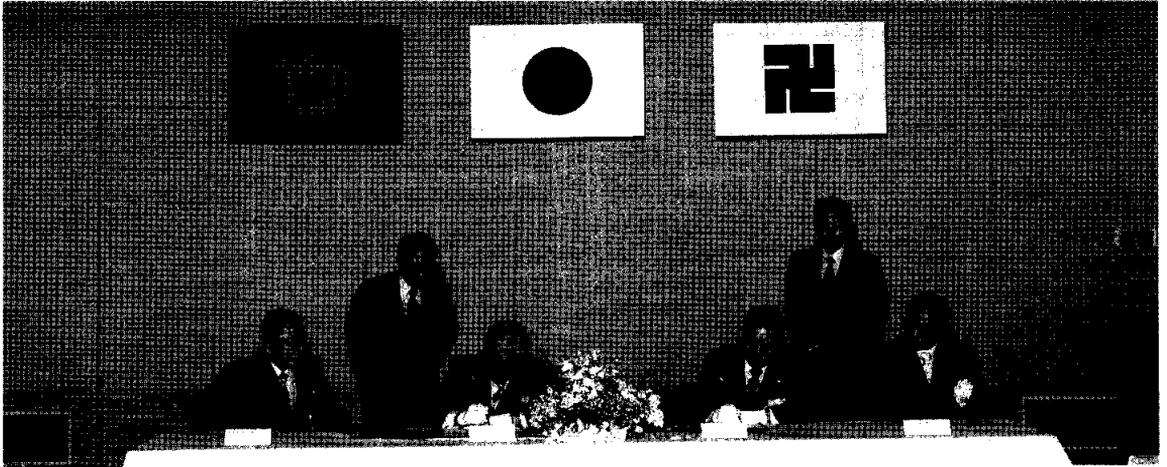


写真2 弘前市、斜里町友好盟約調印式



写真3 平成元年午来町長の慰霊の辞

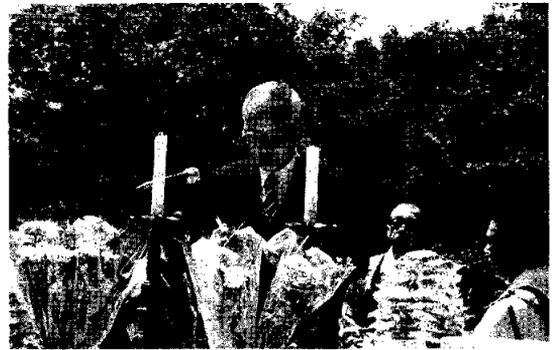


写真4 平成5年金沢市長の慰霊の辞

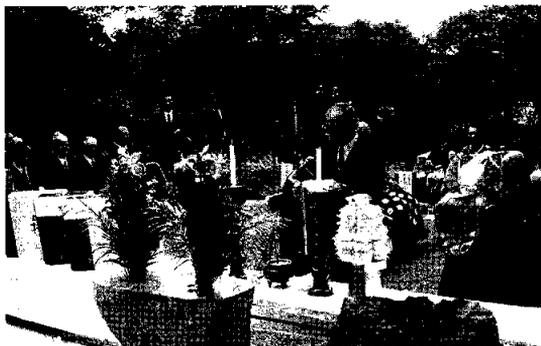


写真5 平成6年守る会会長（筆者）慰霊の辞



写真6 昭和58年町民号代表（筆者）謝辞

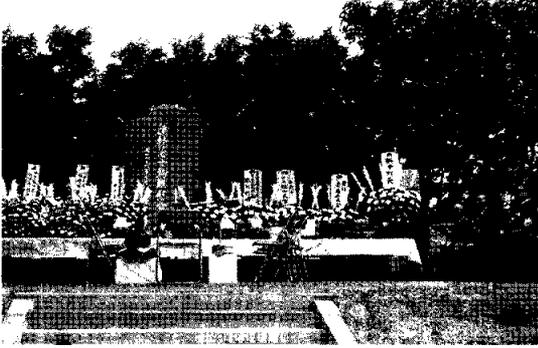


写真7 慰霊祭壇



写真8 弘前芸能保存会の供養の舞

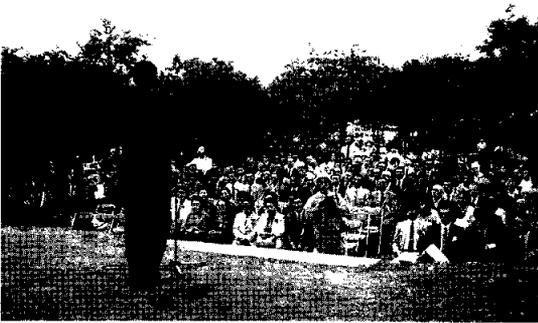


写真9 昭和58年盟約締結の年の慰霊祭



写真10 弘前市制100周年奉祝ねぶた祭参加

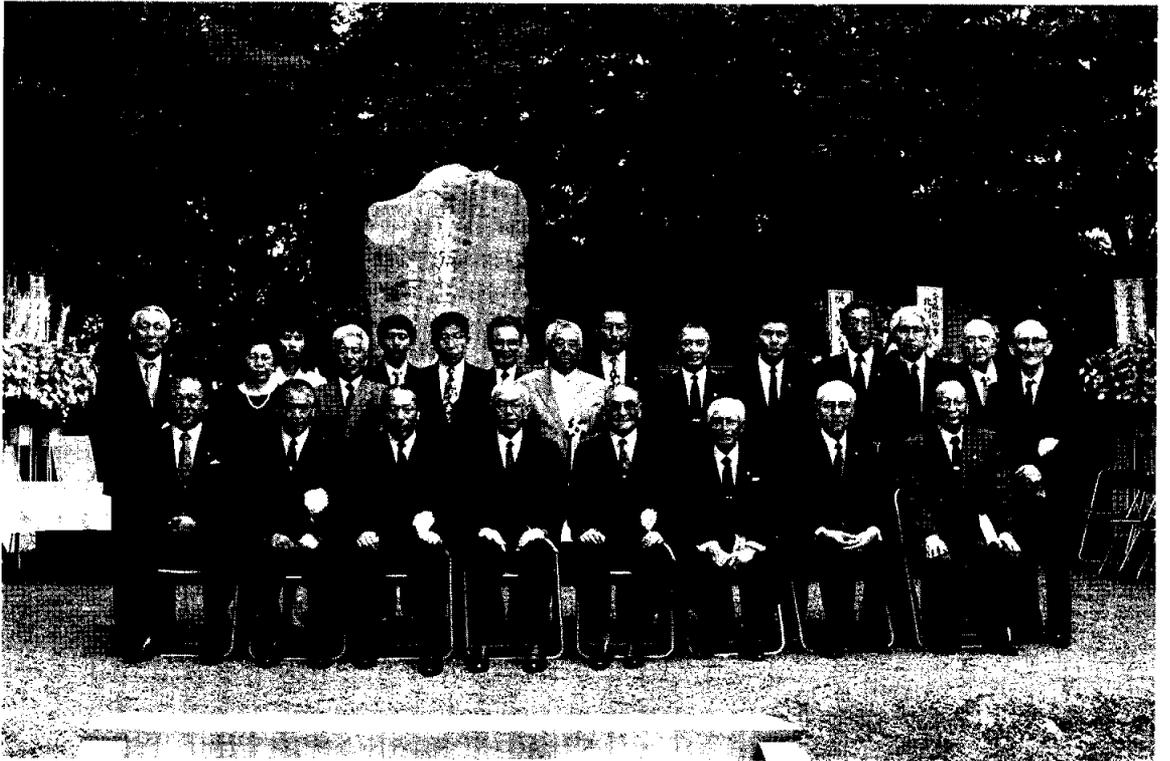


写真11 平成6年慰霊祭記念撮影

た(写真2~11)。それ以来両市町間では行政を軸にして、産業、経済、教育、文化などあらゆる面に活発な交流が行われている。友好とは文字では友人であるが、今日では本家分家の親類交際がなされている。

#### 6. 弘前ねぶた〔斜里保存会〕

この盟約締結を記念して、弘前市から国の重要無形民俗文化財である〔弘前ねぶた〕の暖簾分けをして頂いた。初め1~2年は製作を始め、絵、笛、太鼓、ジャガラなど弘前へ出向いての直接指導、また来斜の現地指導のおかげで現在(平成7年)では18台出陣しているが、全部自賄いの盛大な祭が北国の夜空に展開されるようになった(写真12)。

この会の維持費も会員制で、全町民が参加する自治会員としての一般会員と口数持ちによる特殊会員とに分かれ、昭和59年1月発足されて今年(平成7年)で12回目である。

毎年、7月16日の慰霊祭をはさんでの3晩運行されている。

また、平成元年の弘前市市制施行百周年の奉祝として当町より6mの廻転ねぶたと、町内でも珍しい巨大熊、大鹿、狐の剝製を飾った前ねぶた2台を持ち、総勢230人の町民号を編成して、本家弘前のねぶた祭に奉祝参加した。

平成5年7月の盟約10周年の慰霊祭には金沢市町以下400人が来町、8mの日本一の大ねぶたの寄贈を受く。同年8月の弘前ねぶた祭には180人の町民号(第6回)が6mのねぶたと共に参加。毎年の慰霊祭には弘前側からの参加者は50人を下らない。



写真12 斜里のねぶた祭

## II. 津軽藩士殉難の過去帳と、これを吊って建てられた文化9年の供養碑2墓の現在地に至るまでの経緯

前述のように、今日の我々が悲惨事件の詳細を知り得たのは、〔松前詰合日記〕のおかげであるが、それを物語るように現地、この斜里にもその当時の斜里詰め2人の幕府役人の高邁にして温情ある計らいによって書き遺された過去帳と、立派な供養碑2墓があった。

しかし、この貴重な証も長い間常住する人もいない暗黒時代が続いたために申し送りの聞き伝えも跡絶え、それが何を意味するのか昭和47年郷土史家が本格的な調査にかかるまで、斜里の人達は不明のまま過ぎた。

以下、過去帳と供養碑について。

### 1. 過去帳

戒名をつけてくれたのは、その幕吏の温かい計らいによって、遠く日高の様似の等樹院(文化元年に幕府によって建てられた三官寺のひとつで天台宗)より多分海路東廻りであろう(厚岸、根室、知床岬、斜里)僧をわざわざ頼んで懇ろな法要が営まれているのでその時の僧によって付けられたものと思う。最初に僧が書いた過去帳はその法要の時建てられた。宝篋印塔の中に収められたので、今日禅龍寺に保存されているのは、その時書き改めた写しであろう(写真13)。

表紙に〔斜里場所死亡人控、文化六己巳年、六月改之〕と書いてある。当時シャリとの交通、通信は年に3~4回来る北前船に頼るより方法がなかったのに、引揚げた翌年にこの段取り、よくも計らってくれたものである。

さて、その後の辿り方であるが、

① 始めのうちは、その幕吏が大切に保管していたと思われるが、6年後の文化12年にそれまで幕府が蝦夷地を治めていたのが中止になった(前幕時代の終わり)という。したがって斜里の詰所も廃止され、心温かいこの幕吏も引揚げる運命と

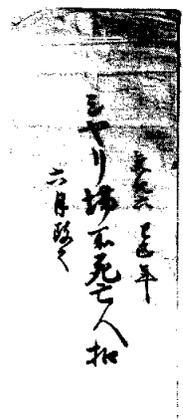


写真13 シャリ場所死亡人控

この幕吏も引揚げる運命となった。

そこでこの幕吏は、この大事な過去帳を、その頃斜里場所を共同経営していた者の一人であった、藤野喜兵衛の場所支配人に、懇々と訳を話し、後事を託して去ったものと思われる。

【幕吏の手許にその間 6年間】

② その後何代の支配人に受け継がれたであろうか。当時は漁場には越冬する者はなく、春遅く来て、秋早く引揚げてゆく繰り返しだったにもかかわらず、どこに、どのようにして大事に保管したものか。一点の汚れも、煤けも、破れもないこの過去帳を見る時、小舟で大自然と格闘する漁場の人達は、守り神として崇めて保管したものだろう。

明治に入り、斜里の下町もだんだん人口が増加し、明治31年今の禅龍寺の前身である禅宗の説教所が、下町の東はずれに建立され、創立二世鈴木勇禅が布教に当たった。付近の住民も立派な寺が建ち、住職の定住を喜んだ。そのような情勢の中で藤野家の支配人は長い長い間預かり続けてきた過去帳をお寺へ託すことを考え、住職に頼んだところ、快諾を得て、漸くここにこの過去帳が、法燈の許におさまることが出来たのであって、今日禅龍寺に保管されているのは、この時からの始まりである（明治31年）。

【藤野家支配人のもとにその間 83年間】

③ その後住職が代わったり、あまり大切にして、本尊下の木箱の奥に収めたりしたため、収め忘れられて失い、また長い長い眠りに入った。昭和28年、現法丈、門田孝道氏が若かりし頃、役僧（金村禪定）と共に春の一日、寺の大掃除をした際、件の過去帳が発見されたが、表紙には「斜里死亡人控文化六年己巳年六月改之」と書いてあり、上質の和紙縦二つ折7枚綴りで素晴らしい達筆で俗名と、戒名が大勢書いてあるが、父子はその由来については全く不明であった。現法丈の父、門田達也氏の直接談。

【お寺に眠ったままその間 55年間】

④ 由来は不明ながらも、門田父子は重大な訳を意味する予感もあり、そのまま、また大切にお寺に保管された。

ところが、昭和30年発行された町史上巻の中に、北海道史研究の大家であった北大の高倉新一郎先生の発見された「松前詰合日記全」より転載された津軽藩の斜里警備の概要の稿の藩士の氏名と、

その過去帳の中の俗名が一致することが判り、ここに漸くその由来が判明した。

そして、お寺では以後、門外不出の重要物として大事に大事に保管されたのであった。

越えて昭和46年、以前より津軽藩士殉難事件の解明に積極的な郷土史研究家達の取組が原動力となって、昭和48年ゆかりの丘に「津軽藩士殉難慰霊碑」が建立されると共に「松前詰合日記全」の詳細な調査解明によって、殉難藩士の過去帳と確認された。

【お寺に由来が不明のまま2年、判明して18年で、その間昭和48年まで20年間】

現在は町の重要文化財に指定され、禅龍寺に大切に保管されている。

【過去帳が書き遺されてから今年まで187年】

## 2. 文化9年建立の供養碑

本町には名号が南無阿弥陀佛と、南無妙法蓮華経とだけ異なった、他は全く同質、同型、同刻字の供養碑が2基ある。ともに文化9年7月20日に建てられ、現在1基は（南無妙法蓮華経）日照寺境内に、南無阿弥陀佛の1基は、慰霊碑の横に在る。

石質は俗に桜御影石（学名 赤色珪岩）と言われ、薄桃色にソバガラを散りばめたような色で、凄く堅く、昔から石屋泣かせと言われるくらいで、斜里に在るのも184年も風雨にさらされながら、文字の細かい線まで全く風化していない。この石は道内では生産されず、主として本州でも岡山県の万成、兵庫県の東灘、京都府の北部など関西地方のようだ。この碑の製作については次のように考えられる。

当時道内一の繁栄を誇った城下町松前にある歴代藩主の霊廟を始め、各種の精巧なる石造製品には、この石が多く使われており、特に長方形の原石を岩礁の海浜に穴を掘り並べて建て、防波堤に使用した跡さえあるほどだ（北前船の帰り空き船の安定を図るため、原石を運んでふだんに使った）。したがってこの供養碑も関西方面で製作せられて、斜里場所共同経営者の中心人物であった藤野喜兵衛の経営根拠地松前にいったん陸揚げされ、さらにまた斜里に運ばれたものと思惟せられる。

しかし、このような信心深く温情のある計画の

発想は、文化6年に日高様似よりわざわざ僧を招いて懇な法要を営み、過去帳まで書き遺してくれた、その時の偉大な2人の幕吏その人なりと私は確信している。

●供養碑が最初に建てられた場所は、大勢の死亡者を葬った墓所でもなければ、陣屋近くでもなく、幕府役人の詰所前の道沿いに2基並んで建てられたようだ（現在の小成田氏宅の下の方、朱田在住の故大口勝太郎談）。

このことは、この配慮深い幕吏が、後世の人この悲惨事忘れるなかれと、祈つての処置とうかがえられ、敬仰の念を禁じ得ない。

●施主（建立した人）

前田久太郎、尾本多吉、惣番人中と刻まれている。その所属については、引き続き調査中であるが、弘前側と道史研究家と私と三説あるが、定かでない。しかし私は前記のように、①様似から僧を呼んだのも、②過去帳を書き遺したのも、③法篋印塔を建てたのも、④供養碑を建てたのも同一人と信じている。勿論その実現の後盾には財力を始め船持ちの協力が不可欠であったろう（斜里場所経営者 藤野喜兵衛）。

●しかし、この供養碑も、言い伝えも、聞き継ぎもないまま過ぎたため、明治、大正、昭和30年までは、誰のための供養碑やら不明のままで、多分硫黄山で脚気のため死亡した人のものと信じていたらしい。そのことは往時の生存者より直接聞いている。

なお、この供養碑は2基とも、町の重要文化財に指定されている。

過去帳の項で述べたように、この供養碑の建立の段取りとなると、なおさら準備が要る。今日なら電話一本で叶うことが総て北前船に頼らざるを得ない。ただただ頭の下がる思いである。

[南無阿弥陀佛の碑について]

この供養碑は現在、津軽藩士殉難慰霊碑東横に安置されてある（写真14）。

①最初の場所は、別記の通り、文化9年に幕府役人詰所前に建てられていたが、明治27年に現在の本行寺北側の当時砂山の高い所に浄土宗の説教所が町内で始めて建てられ（皆月寺）、そこで門徒宗の心ある人々によって、この南無阿弥陀佛の碑を同宗の寺の境内に移し漸く安堵し



写真14 慰霊碑の横に安置された南無阿弥陀佛の供養碑

た。

【寒風にさらされて砂浜に 82年】

②明治27年、皆月寺建立に伴い、その境内に安置され相変わらず付近住民の手篤い守りをうけ、花や供物が絶えなかつた。

【その間 27年間】

③大正10年、その境内の皆月寺跡に西念寺が建立され、引き続き元の場所に安置。

【その間 20年】

④昭和16年、西念寺が現在地に移転建立された。が残念ながら碑はそのまま放置され、崖の下から吹き上げる潮風と雨雪にさらされ、碑の台座は勿論、竿石の三分の一程も砂に埋められるという勿体ない状態で過ごした。

【その間 32年】

※したがって明治27年から昭和48年までの79年間あの砂山の隅にあったことになる。

⑤昭和48年ゆかりの丘に（津軽藩士殉難慰霊碑）が建立された。その機会にこの碑を慰霊碑の東横に移して安置し、慰霊碑と同様に守っている。

【したがって、現在の場所は3回目の所である。

最初に建立してから 184年】

なお、碑に刻まれている南無阿弥陀佛の名号の文字は、道内では松前町の浄土宗、光善寺山門横に在る碑にあるのみで、当時の天下の名僧徳本上人の筆によるものと、研究家の間では認められて



写真15 南無妙法蓮華經（文化9年）の供養碑

いる（全く珍しい書体で達筆）。

したがって、この供養碑は、尊い由来のあるものと思われる。

〔南無妙法蓮華經の碑について〕

この供養碑は現在、日照寺境内に立派に安置、守られている（写真15）。

①文化9年7月20日、詰合前の道沿い2基並んで仲良く長い間立ち続けていたが、南無阿弥陀佛の碑が明治27年、皆月寺へ引越して行った後、一人淋しく立っていた。が、付近の住民は寧ろ、大切に守っていた。しかし、大正時代に入り、病人が続出したり、子供の夜泣きなど、不快なことが数多くなり、あるいは無縁のまま置いてある碑のせいでなかろうかとの話し合いの結果、宗派は異なっても禅龍寺の境内に移させてもらうことになった。鈴木勇禅時代の尼僧の談として伝えられた（門田達也談）。

【この碑も寒風にさらされ、砂浜に101年間】

②その頃、朱円地区の日蓮宗の有力で熱心な信者の力で、中区の長島清治宅に奇遇して近村を布教していた合瀬寛照を迎え、説教所を長島徳次郎所有地区内に建て、早速早くより気につけて

ていた異宗寺境内に仮安置されて在るこの碑を、海岸の山道を馬車に積んで、朱円の法華宗の境内に安置した。時は大正6年、7月であった。

【したがって禅宗の説教所境内に4年間】

③大正12年同説教所が、市街の現在地に移転新築され、この供養碑もこれに伴って、同寺院前の現在場所に移された。

【朱円説教所境内に在ること6年間】

④以来今日まで、寺院及び、壇徒の手篤い守りを受けながら、安置されている。

【現在までその間73年間、4回目場所】

☆「この碑も建ててから184年になる」

附 記

この調査の取材には、すでに故人になっておられる方もあるが、証言を出来るだけ得るとともに可能な限り、物証により瞭にして、推定も極力確率の高いよう努めた。